

『狭衣物語』の女院

等価・置換による物語の展開手法

野村倫子

はじめに

『狭衣物語』は狭衣と、源氏宮・飛鳥井女君・女二宮・式部卿宮の四人の姫君との交渉が描かれる物語である。しかし、時として強引な展開に、先行する『源氏物語』の引用や、変革期の社会制度を勘案しても不自然さのぬぐいきれない箇所もある。そのような物語の展開を解く一つの手掛かりが、女院、及びその皇女一品宮と関わって狭衣の周辺で次々に展開する女君の役割交換である。

制度としての齋院・齋宮が（同一人が齋院に残る事例はあっても）帝の代替わりごとに補充されなければならなかったのに対して、女院や一品宮は制度上必要な存在ではなかった。^① 物語の女院については、別稿^②で末期物語・鎌倉物語の女院の系譜展開をコンテ風にまとめて次のような傾向を確認している。

實在の女院の半数が皇女であるのに対して、物語では『とりかへばや』『いはいでしのぶ』の皇女の二例を除いて、摂関家に連なる女君が妃となり、宣下を受ける。

物語ではほとんどの女院が天皇の生母であり、息子の即位時に宣下を受け、夫の院と生活をともにする。つまり、夫の院と一対の存在である。

歴史的には同時期に複数の女院が並立存在するが、物語においては、

二、三の作品を除いて、同時並立はおろか、物語の最終段階に入つてやっと主人公格あるいはその縁者の女君が宣下を受ける。つまり、到達しうる女の最高位として位置づけられている。

しかし、夫の院の薨去後出家することによって女院号の宣下を受けた初発の女院の姿が色濃く投影された『狭衣物語』では、一条院後の宮が院の薨去後出家して女院に叙されている。また、嵯峨院の女一宮と一条院一品宮を比較した狭衣は心中「筋異なる御有様ども」（巻三・二九二頁）と両者を区別^③、皇女とはいえ、生母が先代の皇女である女一宮が尊ばれ、一品宮の母（女院）は臣下の太政大臣の娘であると、権門とはいえ臣下の家から入内した女院は低く見られ、前述の平安末期及び鎌倉物語の類型化される以前の女院の姿を見せる。

さて、『狭衣物語』では、女院、皇女の一品宮は役割交換を繰り返す女君たちの最高位にあって社会的位置が不動のものでありながら、結果的には逆に下位の飛鳥井母子を権力の中枢にたぐり寄せる。また一品宮に代わって正妻になった式部卿宮の姫君も含めた大きな枠組みで、物語を俯瞰したい^④。

一、今姫君入内騒動をめぐつて

堀川大臣には三人の北の方がいる。堀川上には狭衣と養女源氏宮が、

坊門上には当帝の中宮が子としており、洞院上のみ子どもがいけない。洞院上は太政大臣の女、姉は一条院の後（のちの女院）である。この洞院上の養女今姫君の入内騒動から連鎖的に紡ぎ出される女君たちの交換性を見ることで、序章に替えたい。

源氏宮は、故先帝と中納言御息所との間に生まれ、両親に死別後堀川上の養女になるが、美貌とのうわさから春宮（一条院と后宮）のちの女院（の皇子、後一条院）が入内を望み、帝（のちの嵯峨院）も先帝の遺言から「内裏住み」を勧めるが、堀川大臣は入内の動きをみせない（巻一・三六～三七頁）。大臣は、右大臣の姫君の入内に遠慮（五八頁）、その時期を待つ中に、今姫君が洞院上にひきとられたのである。

初発、洞院上は我が身の「つれづれの慰め」に養女を取ったと堀川上の口から説明される（七七頁）。一条院后宮の女房伯の君の娘で、伯の君の没後、実父は堀川大臣であるとの噂によって引き取ったのだが、今姫君の同母兄が中務宮の少将の子という話から堀川上も出自を訝り（七八頁）、大臣も宮少将の子と半ば確信している（八九頁）。

今姫君の入内計画が浮上するのは、物語第五年である。第三年に代替りがあり、新帝（もとの東宮）への源氏宮入内が確定するが（巻二・一九〇頁）、賀茂神の神告により齋宮となり（一九四頁）、入内は中止になる。そのあとを襲うような今姫君入内計画であった。堀川上への挑み心による洞院上の発案だが、今姫君を宮少将の子と確信している堀川大臣は動かず、一条院薨去後落飾して女院に叙された姉をすぎり（巻三・二二九頁）、二二九から一条院后の宮は「女院」として物語の中心に登場する。洞院上に動かされた女院は早速参内し、今姫君入内を奏するが、帝は大臣の態度に不審の念を呈する。

齋院の御事の口惜しうなりにしを、かごとばかりも、そのゆかりは嬉しかるべけれど、おとこの、さも思寄らざらんは、いかなるべき

か。（二二九頁）

源氏宮の代わりという今姫君を「ゆかり」と呼んで歓迎の意を示す一方、大臣の動きがないことを不審とする。結局、入内に奔走するのは洞院上姉妹の父太政大臣であるが、二月の入内前夜、破綻する（二五〇～二五五頁）。その間、幾度か生母の出自の低さが繰り返されるが（二二九・二五〇頁）、この点は源氏宮との関係だけでなく、飛鳥井女君の出自とも深く関わってくるので次節に譲る。

堀川大臣の養女二人が裏表の関係にあることはすでに論じられている^⑤。二人は、堀川大臣の妻の養女、入内の計画、入内の沙汰済み、という図式では一致する。その一方で、実母の出自、女院・帝・洞院上の側では問題にされてはいないが実父の人物性、本人の資質等それぞれの違いが、結果に於いて運命を峻別する^⑥。

また、今姫君入内ということになれば、坊門上腹の中宮と今姫君はともに堀川大臣の娘であり、后妃であるという等号で結ばれる主旨の狭衣の発言がある（二三三頁）。この、中宮と今姫君の等価性については、今姫君入内の可能性の低さからこの箇所以外では言及されず不発に終わるが、まったく別の所に堀川家の姫君たちと等価の、もう一つの反転が用意されている。

それが、嵯峨院の女一宮である。

物語第六年。帝には特に寵愛深い妃もなく、皇子もなく、后・春宮とも空白という異常事態の中、狭衣の発案で、堀川大臣は前齋院の嵯峨院の女一宮を齋院（＝源氏宮）の代りに世話をして入内させる（巻三・三〇九～三一〇頁）。堀川大臣は「まこと御女のやうに」世話をし（三一頁）、やがて宮は懐妊する^⑦。源氏宮が入内していればありえたであろう幸いが女一宮に移行し、宮の幸いは、そのまま堀川家の幸いでもあった。

女一宮と源氏宮の同一視化は、懐妊中の宮が堀川院の「齋院のおはし

ましし方」に退出したことで鮮明になる（巻四・三五二頁）。さらに年改まつての桜をめぐる二人の交歓は、女二宮の同母姉妹ということが高まる狭衣のゆかしさとともに（三五三―三五六頁）、二人の等号的な様が見て取れる。翌月、宮は皇女を出産し、中宮に立てられる（三六九頁）。

女一宮について堀川家の養女たちと同等には論じられないが、差異を含みつつも交換性が見てとれる。二人の養女は相反する資質を持ちながら結果的には入内せず、女一宮が源氏宮の代わりに入内し、立后する。久下裕利氏は政治力学的に解析して、それを「組み替え」と定義する^⑤。それだけに、失敗した今姫君入内に女院が関与したことは重要であり、女性の最高位にある母后の養女入内への関与は、形を変えた飛鳥井の遣児入内とも深く関わると思われる。

二、飛鳥井女君の遣児をめくつて

その1・一条院一品宮の養女

飛鳥井女君の失踪後、行方を求める狭衣は今姫君の母代から思いもかけぬ情報を得る（巻三・二二九―二四二頁）。今姫君の母は平中納言の妹であり、平中納言の娘である飛鳥井女君とは従姉妹であった。平中納言の死後、飛鳥井は女院から出仕を誘われたが乳母が拒絶し、狭衣の乳母の子である道成に伴われて西国下向の途、入水したと語る。ここでは、飛鳥井の出仕拒否がのちのち、遣児と今姫君の二人の運命を峻別していく鍵となったことが示される^⑥。

母代の言葉を手掛かりに狭衣は常磐に赴くが、そこで飛鳥井女君の死を知らされ、以後は遣児が関心の中心となる。飛鳥井の叔母である常磐尼上から、遣児が一品宮邸で養われていると聞く（二四五―二六頁）。この時の狭衣の発言、「かかる山蔭の垣ほに生ひ出で給はんも口惜しき」は、

『古今集』六九五番歌「あな恋しいまも見てしが山賤の垣ほに咲ける大和撫子」^⑦の一首を受けた表現であり、また、『源氏物語』「帚木」で頭の中將が語った夕顔・玉鬘の母子流離の影響下にある。今姫君入内の際に実母が女院女房であった出自の低さが問題となったが、狭衣にとつても一品宮に引き取られた遣児の母の身分が問題となる。「遣児の姫君が大人びんまゝに、あまたさぶらふめる中納言、宰相の君などのつらにてこそはあらめ」（二四六頁）は、現在は一品宮に可愛がられていても、長じるに及んではせいぜい乳母子と同様の扱いに終わり、女房の列は離れられないとの懸念である。結局、飛鳥井女君の「形見」（二四七頁）である遣児に惹かれて、心ならずも一品宮と結婚する結果になる。宮の生母である女院は、堀川大臣から降嫁を打診されても消極的で今姫君入内の時とはうつつで変わり、狭衣は「この今姫君の内裏参りのやうにもなり候なば」（二六二頁）と破綻を期待するが、父大臣の今上帝奏上で降嫁は急展開する（二七三頁）。大臣・女院・帝の三者ともに今姫君入内の時とは正反対の動きを見せつつ、今回も女院の思惑は大臣に押し切られてゆく。

狭衣が飛鳥井の遣児に直面するのは暫く経ってからである（二八二―二八五頁）。女院の部屋の方を走り遊ぶ童女の集団に目を留めた中に、遣児の美しさが際だつていた。尼の存在する空間で走る童女の群、美質が際だつ姫君との出会いは、『源氏物語』「若紫」巻の、北山での若紫発見の場面を思わせる^⑧。「若紫」の引用をずらすのは、この姫君が飛鳥井とは母子であつて、『源氏物語』引用に拠つて藤壺と若紫の伯母・姪の関係による「ゆかり」のコードで読む必然性がないからである。「若紫」の引用は、三節で取りあげる新たな女君に対してこそ意味を持つ。

「宮の御前の男とこそ。されば姫宮の御父にあなれ」（二八四頁）という年かさの女童の声で、女兒の父が狭衣であるとの養父・養女関係が認

識される。一方、乳母を「母とこそは」という女児に狭衣は「今よりは（私も）母をこそ頼み聞えぬ。」（二八六頁）といい、父子関係の追認が姫君に伝えられるが、「忘れ形見に」の狭衣の一言から実の父娘と知った一品宮との不仲は決定付けられる。

「忘れ形見に」の一言以降、宮は心中「これがゆかりばかりに」（二八七頁）と嫌悪感を明示し、自らが遺児の「ゆかり」としてしか狭衣に価値付けられないことに対して、「ゆかり」であることを拒絶する。狭衣の実子と知り、自分がその母となることへを拒絶することは、つまり遺児の生母飛鳥井と自分が等号で結ばれることへの拒絶であろう。飛鳥井との交換の可能性を認めないのである。狭衣から、宮邸で女児の袴着の儀式をと提案され不快になるが（二八八―九頁）、女院にも真相を明かさぬまま堀川邸に女児を渡し、嵯峨院の若宮とともに儀式を行うよう謀る。一方狭衣から一族の誉れある女性として「御腰結」を依頼された女院は辞退し、代りに堀川大臣に役を依頼する。結果的に宮は女児の養母として直接儀式に関わることを回避し、女院は腰結役を譲ることで宮家の「ゆかり」として遺児を我が身には引き受けなかった。袴着の儀式を通じての女院の関与は、女児を狭衣の子と認めさせつつも、母として飛鳥井と一品宮の交換の可能性を封じることになる。女児が母の出自を越えて、内裏に迎えられるには、狭衣と式部卿の姫君の結婚を待たなければならぬ。

三、式部卿宮の姫君との成婚

式部卿宮の姫宮の登場は、兄の宰相中将の薦めに拠るが（巻三・三―四頁）、源氏宮の筆跡を話題に、姫宮その母式部卿宮北の方を堀川大臣が褒めたことから始動する（巻四・三五五頁）。しかも、何れの時も今上

帝の女御となった女一宮の事績と連動して話題になっていた。宰相中将が妹を紹介したのは、女一宮の懐妊が判明し、堀川大臣から帝に奏上された直後であり、宰相中将の「人よりはおかしき」様に狭衣は「妹の姫君も、かようにや」（三三四頁）と心を引かれる。しかし、この時は女二宮へと場面が移り、他の女君の場合と同様不発に終わったかに見えた。女御が出産を控えて旧源氏宮邸に退出した折、齋院の御前の桜を契機に互いに歌が交わされる。二人は堀川大臣家の政治的持ち駒としては等価であるが、狭衣にとっては源氏宮こそが交換不可能な絶対的存在であった。堀川大臣は源氏宮の手跡を褒めた後、当代ぎつての能筆家として「式部卿宮の上」の名を出し、「文字やうの、細かにをかしげなる様など」は源氏宮が勝ると評す（三五五頁）。故式部卿宮邸を垣間見たのは、その直後であった（三六一―三頁）。

そこでは、堀川上にもまさる美しさの母北の方の姿から姫君を期待させる仕掛がされている。のちに母北の方の代筆の筆跡に美質を再確認させられるように（三六八頁）、まず母の式部卿宮北の方の大人の美質が狭衣の心をとらえる。この垣間見の場面が「若紫」をすらしての引用であるのは明白であるが、その後も場面設定や表現や人物に至るまで姫君を堀川邸に引き取るまで何箇所にもわたって引用が重ねられる。

狭衣が姫君に対して興味を深め始めた頃、宰相中将は、春宮から入内の要請があったことをうち明け（三六六―七頁）、中将自身は、春宮入内を勧める母君を説得する。

この殿（＝狭衣）の御女とて、一品の宮に生ひ出で給姫君（＝飛鳥井遺児）、今より心殊に思ひ聞え給める。今二三年すぎば、（春宮に）参り給ひなんとすなり。これ（＝妹の姫君）は、いみじうとも、きしろい聞え給なんや。（三七六頁）

袴着の儀式への関わり方で遺児と一線を画した一条院一品宮ではあつ

たが、世間的には狭衣と一品宮の養女として定着し、政治的な存在となつてゐる。その姫君（飛鳥井の遺児）が春宮に入内すれば妹の姫君に勝ち目は無いといい、また、返す言葉で一品宮が世間にどう映つてゐるのか示して見せる。

この（＝狭衣）御有様、一品の宮おはするにても、うちくの御心ざしなどを見侍めるに、「なかは（妹の姫君があるかに扱われようか）」とこそ、見侍れ。（狭衣の）世の思やりよりは、名残なき物忘れなどし給べくもなき御心を。ただ、時くにても、（狭衣が）うち通ひ給はんは、生けるかひあるべきわざかな。（同）

狭衣と結婚しても正妻の宮故に妹の姫君がないがしろにされることはないという理屈である。

この間、飛鳥井腹の遺児は他との交換性を拒む存在となつており、一方の一品宮と式部卿宮の姫君は交換可能とまではいわないが、宮によつて排除される可能性はないというのである。母北の方の中では狭衣と春宮は拮抗する存在であつたが、見舞いに訪れた狭衣を間近に見て、「かぎりなきものに思ひ聞え給宰相中将の御有様などには、似るべうもなかりける。」（三八二頁）と、宮家の次代を担つと期待してきた子息の宰相中将とは比較にならない立派さに圧倒され、姫君を託す決意をかためる。

狭衣が姫君と対面したのはその後であり、以降源氏宮との相似が繰り返し述べられる（三八六～七頁）。「ゆかり」でもなく「似る」ことが五回まで繰り返される「形代」のあり方については久下裕利氏が早くに指摘^⑦、鈴木泰恵氏も藤壺が狭衣にたぐり寄せられるまでを分析したが、「若紫」引用を初発に、結果的には「ゆかり」ではなく源氏宮の「形代」という位置に納められてゐる。姫君の「まだいと幼げなる御手」（三七二頁）に、源氏宮との相似を強調するあたりに藤壺女御の形代として若

紫の将来に期待する光源氏を彷彿させ、母君逝去以降の姫君の心細さ、堀川邸に狭衣から伴われその豪華さに驚くに至る一々については（三七九～四〇九頁）土岐武治が詳細に対比している^⑧。

このように「若紫」のコードに沿つて展開する式部卿宮の姫君との結婚であつたが、ここにも女院が点描される。狭衣は式部卿宮北の方の四十九日の忌明けを待つて姫君を引き取るうとしたが、女院が「御物の怪だちて」（三九四頁）重態になつたために、婿である狭衣は女院のもとを離れられなくなる。そのまま四十九日も過ぎ、三条邸に姫君を移す計画を定めると、今度は女院崩御（三九六頁）のためにまた日延べを余儀なくされて年末近くまで成婚できないなど、最後まで結婚の障害となる。成婚後、堀川上は狭衣が一品宮の時とは異なり妻に愛情を注ぐ様に安心をするが（四一〇頁）、大臣は結婚は宮への心遣いを忘れないよう釘をさす（四二二頁）。しかし、女院の崩御で一品宮の出家志向は一層強くなり（四二二頁）、もはや式部卿宮の姫君との結婚生活の障害とはならなかつた。

堀川邸入りの翌朝、姫君の弁乳母の目を通して狭衣の装束が描写されるが（四〇四頁）、姫君については狭衣の大式乳母の目を通して「取る手もすべるやうなる筋の美しさなど、斎宮の御髪にいとよう似給へり」（四〇五頁）と源氏宮との髪に類似に触れられるにすぎない。新年十五日に「新しき年の忌々しさにや、いと黒きなどはなうて、浅葱の濃き薄きなど、珍しきさまに、あまたうち重ねて、上にも、おなじ色の無紋の織物など重なりたるも、いとこはぐしう映なかるべきを、あくまで花やかにたをくと、匂ひ多く着なひ給」（四一五頁）とようやく軽服の描写が、狭衣即位後の入内に際しても「墨染にやつれ給へりし御有様にだに、御手洗川の影にも並び聞えさせ給へべく、ありがたかりしを」（四三五頁）と、ことさら喪服の美と源氏宮との相似が語り続けられる。喪服をまと

う共通性で一品宮の出家(四三一頁)と対置されての正妻の座の入れ替わりといえるが、社会的な地位は別にして、狭衣にとつて等価でないことは自明である。喪服については、すでに、宮と源氏宮の「われもこう」の装束を比較して語られていた。姉皇太后宮の喪中、源氏宮の「われもかうの織物の重なりたる」さまを、「春の花、秋の紅葉よりも中くなくつかしう見ゆる」と感じ、「まことにあなめでた」とした狭衣が(巻一・一七三頁)、一品宮については「いと匂ひなく、すさまじき心地したる」(巻三・二八二頁)と酷評した。母君の喪服を装う式部卿宮の姫君がそれでも源氏宮にひけをとらないのは、この「われもかう」の延長線上にあり、同時に一品宮との美質の対立をも表した。

やがて、狭衣の即位後藤壺に入内して皇子を出産するが、藤壺は本来一品宮が後一条帝の時代に同としていた殿舎で、式部卿宮の姫君はそっくり一品宮がなつたであろう妃の位地に取って代わつたといえる。女二宮との皇子のことは当然、「一品の宮の姫君の御事をだに、世中の人は知らねば、たゞ、これを始めたる事と思ふに」(四三九頁)と社会的に認められた唯一の母としての地位を得る。鈴木泰恵氏はこの藤壺の幸いを「本来源氏宮がつくはずの位置」と評する。^②

四、飛鳥井女君の遺児をめくつて

その2・一品宮

一方、飛鳥井の遺児の存在を機軸に、飛鳥井と一品宮の位置づけがゆつくりと転回していく。

第六年、狭衣は出家を決意して齋院の源氏宮に別れを告げる。その直後、賀茂神の神意が発動して天変、雷鳴鳴り響き、常ならぬ薫香まで燻り出て、帝上達部以下皆大騒ぎになる(巻三・三三四～三五頁)。齋院に駆

けつた堀川大臣に狭衣は女院の風邪を見舞うところだと言い(三三六頁)、翌日、堀川大臣夫妻の不審に對して狭衣は「女院の御心地、ことにもおはしますず」として、代つて「常磐と申所に、ねんごろにあひ語らひ侍る尼の患ふ由、うけたまはりし、訪ひ侍らん」(巻四・三四四頁)と言ひ訊を重ねる。女院は一品宮の生母で狭衣には義母となる。常磐尼君は受領の妻にすぎないが、飛鳥井女君の伯母であり遺児の姫君の庇護者であり、狭衣にとつて余人に代え難い存在である。いわば社会的には対極にある二人が、狭衣にとつては「見舞い」をキーワードにして等価になっている。

狭衣の出家志向の高まりは、一品宮との疎遠を深め、姫君の成長がそれに拍車をかける。狭衣は一品宮とは過ごさず姫君を懐に臥すことが多く、倉田実氏はこれも「若紫」の引用とするが、抱かれる対象は妻となる若紫から実の娘へとずらされている。心づきなき「ゆかり」(四一八頁)とする一品宮は狭衣に引き渡して公表することを決意、帝位についた狭衣の後宮に姫君一人を送り込む(四三二頁)。かつて一品宮が女院とともに賜つた藤壺(巻三・二五五頁)には式部卿宮の姫君が入つており、遺児の姫君は弘徽殿に入る。宮の薨去後(四四三頁)、裳着を機にその存在が公表される(四四七頁)。さらに故一品宮の兄である後一条院から(誤解からとはいえ)「形見」と認識されることで社会的位置も定まる(四四七頁)。

一条院にも、昔、二宮(=一品宮)の、あはれに思ひ扱ひたりし御事、御覧じ知りにしかば、「形見にも誰かは」と思ひ召して、かゝる(裳着の)御急ぎをも聞き放たせ給はず、心殊なる御装束ども、扇・薫物などやうの物をぞ、御心ざしのしるし殊にて、たてまつらせ給ける。(四四七頁)

故一品宮は結婚後間もなく狭衣と姫君の親子関係を知るが、不快は母

の女院にも兄の後一条院にも知らされず、ついにここに皇女として公表される。故一品宮の「かずならず思しあなづりし」姫君が実母は不問のまま養女の資格をもって、同夜そのまま「一品宮」に叙され(四四八頁)、一条院一品宮のしめていた正妻の座は式部卿宮の姫君に、名は飛鳥井の遺児に嗣がれる。内親王一品宮は親王の場合とは異なり、かなり低い年齢で、しかも(二品を経ず)直叙される。決して多くはない事例であるが、それらの皇女は后腹で、一の皇女であった。ここで飛鳥井の遺児の姫君は実母は不問に、本来なら后として入内するはずであった一条院一品宮の皇女として、位置が確立したのである。

若い一品宮の叙述に最も筆を費やされるのは、常磐の尼君の死後、四十九日を待つて娘の中將が飛鳥井の遺品を届けた場面である。飛鳥井女君の母としての遺詠に涙し、途中から同席した狭衣帝は絵日記から自らの恋の軌跡をたどる。(四五六、四六二頁)。しかし、今まで故飛鳥井女君を回想しては比較されてきた姫宮との容貌の相似が語られなくなり、狭衣の心配は、女君の往生のばかりである(四六二頁)。

交換され、置換される女達の物語は、ここで突然打ち切られる。

五、『狭衣物語』の女院(結びにかえて)

狭衣は姫君の袴着に際して「何かは、わざとだに、院(=女院)の御前に、女子は、手触れさせたてまつらまほしければ」と女性の最高位にある女院を持ち上げ、腰結いを依頼する(巻三・二九〇頁)一方、妻の一品宮について母が女院とはいえ只人の筋と貶める(巻三・二九二頁)。前者は公式の見解であり、心中表現である後者が本音である。飛鳥井の遺児は、その一品宮からさらに貶められる存在であった。

洞院上の養女今姫君は一条院后の宮の女房であり、その出自が入内に

困難をきたす一因となるが、飛鳥井の女君は出仕を拒否して狭衣の愛を受ける。その遺児の縁で結ばれた狭衣と一品宮であるが、女院は今姫君、あるいは飛鳥井の遺児といった自らの女房クラスの女性を母とした姫君たちに「女院」という女の最高位を権威付けを保証する役割を担わされてしまった。病による重態から薨去の過程で式部宮の姫君との結婚を阻む存在になるが、それは事態の推進を遅らせたにすぎず、皇女の一品宮の地位と名はそれぞれ別の女性に継承されてしまう。狭衣と堀川大臣が政治的意図で女君たちを次々に役割交替をさせて皇位に結びついていく中、女院は堀川大臣と時として利害関係において対立しながら女君の交替の中心に位置し、社会的な絶対性において交換の対象とは決してならず、不動の位置のまま、周囲の女君たちの等価性による交換を見下ろす位置に身を置く。しかし、所生の一品宮は狭衣の用意した幾つもの交換性に絡め取られ、正妻の座も一品宮の権威も譲り渡して退場する。

女一宮が摂関家の出身の女院を母とするとして思いおとされながら、飛鳥井の遺児は母の出自を不問に狭衣の娘として一品宮となる。母系を見るか、父系を見るか、同一の視点で価値体系が築かれたのではなく、すべて狭衣中心の価値観で物語は続けられた。逆に女君たちの側からいえば、役割交換を呼び込んだのは、入内や結婚といった「妻」の立場をめぐる女君の交替よりも、「母」の問題であった。洞院上も一品宮も子を持たない正妻であり、女院が養女の社会的地位向上に積極的に荷担した理由はそこにあると思われる。一つの絶対的な記号として物語世界に位置づけられる平安後期や鎌倉の物語群とは違う、「母」性に拘わる古体の女院の姿であった。

齋院入りすることで交換性をのがれる源氏宮、子を残して仏門に入り交換の可能性を閉ざした女二宮。女院は、狭衣にとっては役割交換の要にあり、その権威を利用することで飛鳥井の遺児を皇女へと引き上げる

機能を最大限に發揮した。『狭衣物語』は女二宮への行幸で、物語を閉じる。女二宮は若君こそ残すが「身代わり」は残さなかった。女院の薨去によって、交換され、取り替えられる女君たちの物語は急速に終息にむかう。

注

- ① 女院については橋本義彦「女院の意義と沿革」(平凡社選書67)『平安貴族』一九八六年)に拠る。正暦二年(九九一)の東三条院の薨去後、万寿三年(一〇二六)の上東門院の宣下まで二六年の空白があり、『狭衣物語』成立の時代にはまだ後世の物語群に見られるような女院の系譜は未成立であった。また、一品宮については、安田政彦「一品親王」(『平安時代皇親の研究』吉川弘文館一九九八年)が沿革を整理、一〇世紀以降後冷泉までの内親王について、后腹の皇女で、親王と異なり二品からの昇叙に在品年数にとらわれず、特に藤原道長に連なる皇女の場合は直叙もあつたとされる。両者とも后と内親王として当時の最高位であったが、制度として確立した齋院・齋宮とは異なつた、いわば撰関家側からの要求で組み込まれた(臣下の側といつてよかるうか)の制度であつた。
- ② 「物語の女院、素描 平安・鎌倉物語に見える「女院」の系譜」『源氏物語と天皇』高橋亨・編 森話社 二〇〇四刊予定。
- ③ この差異化はすでに『源氏物語』に見える。柏木は御息所腹の女二宮(落葉宮)ではなく女御腹の女二宮の降嫁にこだわつた(「若菜上」)。なお、『狭衣物語』の本文は岩波書店日本古典文学大系『狭衣物語』一九六五・三谷栄一・関根慶子 底本は内閣文庫本)に拠り、(必要な場合は)巻・頁で示した。
- ④ 女院・一品宮の問題ではなく、太政大臣家からの堀川大臣家王権奪還と読む平井仁子氏の『狭衣物語』試論(『物語研究』2号 物語研究会一九八〇年)がある。
- ⑤ 井上眞弓『狭衣物語』の構造試論(『日本文学』一九八二・一〇

- 『研究講座 狭衣物語の視界』王朝物語研究会・編 新典社 一九九四)以下同書については編・出版社・出版年を省略 堀田悟『狭衣物語』の今姫君と源氏宮 后がねとしての社会的地位(シオン短期大学日本文学会『日本文学論叢』22 一九九七・三)。倉田実『狭衣物語の「ゆかり」の語誌』(『大妻女子大学紀要 文系』第三十五号 二〇〇三・三)。
- ⑥ ⑤の倉田論文は、二人の母の出自の違いから「ゆかり」の恋の可能性が封じられたとし、⑤の井上論文は、宮腹が否かによって今姫君と源氏宮は聖と俗に分けられたとする。また、入内の枠組みだけでなく、巻三の末尾、齋院となつた源氏宮の琴の演奏場面は直接狭衣の評言はないものの、今姫君との対置を印象づける。宮の「他事よりも、挑ませ給琴なれば、聞き給には、例も弾かせ給はねば」(三三二頁)と自信ゆえに琴を弾こうとしない姿は、「いでや、なべて人の、聞き知らせ給べくも侍らず。筋殊にこそ侍なめれ」と自信満々の母代に責められて琵琶を弾じて不才を露呈した今姫君(二三五頁)の姿の裏返しでもあろう。
- ⑦ 倉田実『狭衣物語』の嵯峨院とその皇女たち(大妻女子大学国文学会『大妻国文』34 二〇〇三・三)は、入内決定後に宮を養女としたと解する。立派に「御後見」した堀川大臣を理想的な養父とする。
- ⑧ 久下裕利「一品宮の設定方法」(『狭衣物語』の人物と方法)新典社一九九三)は、齋院を訪れた狭衣の「心中願望的な交換構図」とする。この時の手跡をめぐる狭衣の思いは、三節で取りあげる式部卿宮の姫君を物語へ呼び込む回路とも関わってくる。
- ⑨ 「『狭衣物語』の方法 作中人物継承法」。⑧に同じ。
- ⑩ ⑤に同じ。飛鳥井女君への出仕要請、その女兒の引き取りなど、平中納言家と一条院の後の宮母子の親密性は吉海直人氏の説かれる「親類の女房」(『親類の女房』攷 乳母に比肩する女房)『日本文学協会』日本文学』二〇〇〇・三)のような関係を想定させる。飛鳥井の父の帥中納言も早くに亡くなつた為に中納言止まりであるが、決して将来性のない職官ではなく(田中篤子「大宰帥・大宰大式補任表」(東京女子大学読史会『史論』26集・27集 一九七三)、拙稿「飛鳥井姫君の九州 入水と「形見」の姫君をめぐって」(『立命館文学』507号 一九八八・七)、撰関家との婚姻も可能であつたであろう。

- ① 本文は岩波新日本古典文学大系『古今和歌集』に拠る。『狭衣物語』の流布本（新潮日本古典集成『狭衣物語上』九七頁）は卷一の飛鳥井失踪直後にもこの一首を引用するが、いずれも「山賤の垣ほ」が引用語であつて「撫子」ではない（拙稿「飛鳥井君をめぐる「底」表現 流離と入水の多重性」、『論叢 狭衣物語』3 引用と想像力『王朝物語研究会 新典社・二〇〇二年』所収）。一方「撫子」の引用については、『古今集』のとは別に『源氏物語』「紅葉賀」の和歌引用から、藤壺と冷泉の母子関係を女二宮と若宮の母子関係に呼び込む表現とする倉田実氏の考がある（『狭衣物語』の若宮をめぐる『源氏物語』引用からの創造）（『論叢 狭衣物語』3 引用と想像力『同右』）。
- ② ① 拙稿
- ③ 土岐武治は『狭衣物語の研究』（風間書房・一九八二）で、狭衣の高野山詣で（山伏登場によつて飛鳥井女君の生存を知る）は光源氏の北山詣での影響下にあるとし、飛鳥井の姫君や若紫の存在を具象化して現実の方向へ向ける階梯に共通性を認めるが、本場面についての共通性にはふれていない。
- ④ ⑤ 倉田論文。
- ⑤ 倉田論文。
- ⑥ ⑬に同じ。倉田実「形代の恋の狭衣」（『狭衣の恋』翰林書房一九九九）所収。垣間見は「若紫」の異化とし、宮の姫君が源氏宮と血縁でないことから ゆかりの恋 は成立しないとした。
- ⑦ ⑨に同じ。
- ⑧ 「狭衣物語後半の方法 宰相中将妹君導入をめぐる」早稲田大学国文学会『国文学研究』九三集 一九八七・一〇 『研究講座 狭衣物語の視界』。
- ⑨ ⑬に同じ。
- ⑩ ⑧に同じ。
- ⑪ ⑬に同じ。
- ⑫ 「飛鳥井の姫君の位置づけ」（『大妻国文学』31号二〇〇〇・三）
- ⑬ 通過儀礼の機能については豊島秀範氏『狭衣物語』における物語展開の方法 通過儀礼の果たす機能（『弘前学院大学紀要』17 一九八一・

三 『研究講座 狭衣物語の視界』参照。
④ ① 安田論文。

大阪府立茨木高等学校教諭
本学非常勤講師